授与機関名　順天堂大学

学位記番号　乙第 2518 号

Long-term outcomes of postgastrectomy syndrome after total laparoscopic distal gastrectomy using the augmented rectangle technique

ART を用いた腹腔鏡下幽門側胃切除における胃切除後症候群の長期成績

山内　卓（やまうち　すぐる）

博士（医学）

論文内容の要旨

胃癌に対する胃切除術においては、癌の根治性の追求とともに、その再建方法も臨床上重要な因子である。胃切除後の再建方法は患者の術後愁訴や QOL に大きな影響を及ぼすが、その最適な再建方法については依然として議論の余地がある。我々は腹腔鏡下幽門側胃切除後 Billroth I 再建の手法である Augmented Rectangle Technique（ART）を 2013 年に独自開発し、その良好な術後短期成績を報告した。しかし、その長期成績への影響、特に胃切除後症候群と QOL への影響については明らかではない。そのため、胃切除後症候群評価尺度-37（Post Gastrectomy Syndrome Assessment Study-37; PGSAS-37）質問票を用いて、ART による Billroth I 再建の胃切除後症候群と QOL を分析することを目的とし研究を行った。対象患者は順天堂大学において、2016 年 7 月から 2020 年 3 月までに胃癌に対する腹腔鏡下幽門側胃切除、ART を用いた Billroth I 再建を施行した 94 症例（ART 群）で、PGSAS-37 質問票を用い解析した。対照は PGSAS による全国多施設共同横断研究で示された他施設での幽門側胃切除後 Billroth I 再建症例 909 例（PGSAS 群）とした。ART 群は、症状カテゴリーにおいて、すべての症状サブスケール（食道逆流、腹痛、食事関連愁訴、消化不良、下痢、便秘、ダンピング）、また、全体症状スコア（1.6±0.4 vs 2.0±0.7、P<0.001）が有意に良好であった。生活状況カテゴリーでの体重減少率は、PGSAS 群より ART 群の方がわずかに大きかった（-9.3% vs -7.9%、P=0.054）。ART 群は、QOL カテゴリーである症状、食事、仕事不満度のスコアが有意に低かった。胃癌に対する腹腔鏡下幽門側胃切除術後 Billroth I 再建手法である ART は、胃切除後症候群と QOL に有益な長期結果をもたらす。